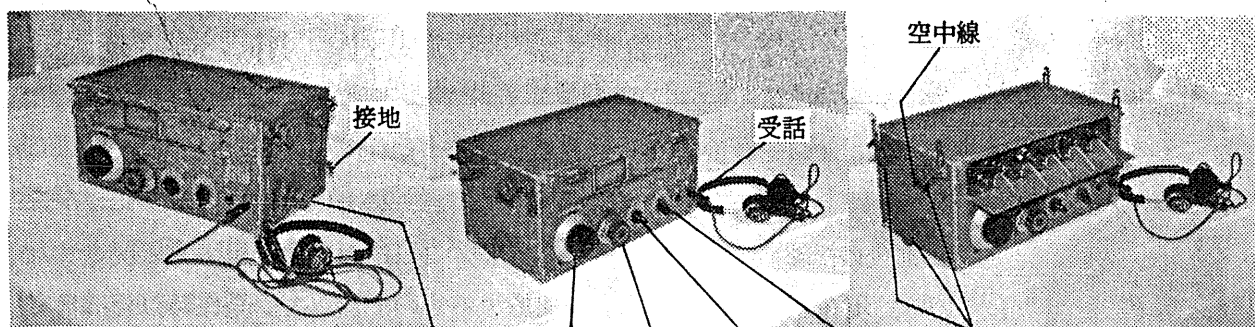


200字請

—— 昔 日 の 機 器 ——

## 航空機用中波受信機



中波受信機

電源

コネクター

同調

微細

音量調整

再生

緩衝紐掛

ノブ

周波数帯 200 KC ~ 550 KC

一 型 式 SRP - 292 J

D L - 3996

No. 400313

昭和 16 年製造

我が国の民間定期航空は、1922（大正11）年11月日本航空輸送研究所に許可されたのが初めてで、本格的には1927（昭和3）年10月、日本航空輸送株式会社（1938年、昭和13年12月大日本航空株式会社になりました）が創立されて始まりました。簡単に申しますと国策会社でしたので軍との関係も深かったわけです。

太平洋戦争開戦の準備段階に入ったころ、大日本航空株式会社に対して戦時動員計画が作られ、一般商業航空業務から戦局が緊迫するにつれて大日本航空の全機能をあげて軍用に投入することとなり、全路線に塔乗する旅客と貨物は会社の手を離れて陸軍及び海軍の管理下に移されました。

このような事情で航空機に搭載した無線機も軍用のものと同じ機器を使用するようになりました。

写真は航空機用受信機ですが、私が学生の昭和16年中ごろには、目黒校舎4号館と呼ばれた建物の中の通信の実験実習室の中に、航空機内通信士席の実物大の模型があって、その中に両側をゴム入りの緩衝紐で上部左右に2箇所下部

左右1箇所ずつ固定して、機体の振動から守るようにつるしてありましたのを覚えておりますが、直接操作したことはありません。

また受信機及び送信機が一体になっていたのですが、現在送信機は見当りません。

この受信機に使用されている真空管は6C6, 6A7, 6C6, 6C6, 6F7及び38の6球です。

いろいろ調べてみましたが、海軍系には該当するものはありませんが、更に調べてみたいと思います。旧制の卒業生の方は多分記憶に残っていると思います。

昭和20年8月24日まで飛行を許されていた“日の丸”のついた航空機の通信はモールス符号による無線通信方式で、無線電話は軍用の極めて限られた範囲だけで使用されていました。ちなみに戦時中私の使用した空3号電信機（海軍機用）の受信機の真空管はすべて6D6で故障のときには便利でした。

（本学名誉教授 宮 坂 武 芳）